

夢とロマンを求めて

## 目次

夢とロマンを求めて

- 一、 若き人へ
- 二、 オリンピック競技
- 三、 挑戦者チャレンジヤ
- 四、 雄魂
- 五、 スフィングスの謎
- 六、 月桂冠
- 七、 短距離ランナー
- 八、 夢とロマンを求めて
- 九、 不死鳥 1
- 十、 不死鳥 2
- 十一、 英雄（ナポレオン）について
- 十二、 リーダー
- 十三、 人生（人の一生）
- 十四、 「名人・達人」
- 十五、 人生の深み

\* 参考文献

若き人へ

若き人へ

——勿論、あれこれ深く言及できる存在なり立場ではありませんが、何時の世でも、また、如何なる時代、如何なる国家、社会においても、恐らく、あらゆる欲望、あらゆる矛盾、あらゆる紛争、揉め事、そして、怨恨、妬み、嫉妬、憎悪、不平、不満、無軌道、犯罪、その他等、もうありとあらゆるものがこの世に地上に満ちあふれていることでしょう。また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、福祉、公害、食糧、エネルギー、その他、もうありとあらゆる分野、領域にわたって多種多様な問題が数多く山積していることでしょう。それらの様々な問題に興味を感じ抱き、そして、自ら進んでそれらの問題に積極的にと取り組むことも、もちろん、重要かつ大事なことであるだろう。しかし、ここでとくに若い人に望みたいと思うことは、まず、自分を磨き、育てることから始めてもらいたいということなのです。自分が人間としてまだ未熟であるならば、この世の様々な難題に積極的に取り組んでも、多くの場合、未熟で未解決のまま終わってしまうことが多いだろう。もちろん、この世の様々な問題に積極的に取り組むことは、多くの意義も価値もまた人間形成にとっても大きな意味があるが、ただここで若い人に特に望みたいと思うことは外でもなく、それはやはり、まず、自分を磨き、育てることから始めてもらいたいということなのです。『青春』を心から謳歌することも、もちろん、重要かつ大事なことであるだろうが、それと同時に、また、「一人の人間」となるための「基礎作り」をしつかりとしておくことも、それに劣らず極めて重要かつ大事なことのように思えるのです。そのためほんの僅かばかりの事柄を、ここに幾つか箇条書きにしておきたいと思う。

- 一、自分の体を何か運動などを通して、無理なくしつかりと鍛え、育てておくこと。
- 一、種々の書物を読み、心の「土壌」を肥沃にし、内的世界を拡大、拡充しておくこと。
- 一、過去の様々な「体験」を何度か自分なりに反芻し、より高い「経験」にまで高めること。
- 一、何か心から熱中できるようなものを見つけ出して、前進、進歩を求めて努力すること。
- 一、自分の思いを何らかの形で実際に表現してみることに。(文章、音楽、絵、その他)。
- 一、自分の心の奥深くに眠っているであろう
  - 一、自分を狭め減ぼすような道ではなく、
  - 一、自分を真に生かし、育て深めるような道を選ぶこと。
- 一、自分の夢を、自分の可能性をでき得る限り追い求めてもらいたい。
- 一、自分の人生に目的、目標を持って、その目標に向かって努力を積み重ねること。
- 一、小さな自分の殻を何度もち破りながら、より大きな自分へと脱皮しつづけること。
- 一、自分の殻だけに閉じ籠らずに、広く視野を世界の動き、国内の変化、またこの世のいろいろな分野、領域へと拡大、拡充し、また広く社会性や人との交わりなどの人間性なども培い、様々な知識や思考能力なども豊かにしておくこと。そして、今、この時だけではなく、過去、現在、未来というこの大きな時の流れを自覚し、そして、できる限り、過去を踏まえ、未来を見つめ、そして、今、この時を大事に生きるように心がけること。

——そして、

たとえばどのような世の中に變化、変貌しようとも、またどのような社会になろうとも、またいかなる境遇、いかなる苦難、いかなる困難、そしていかなる状況に臨んでも、出来得る限り、自分を見失わず、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得る  
そういう大地にしっかりと自分の足を踏んまえ、自分の意志で歩み、自らの人生を切り開き得る、そういう精神の自立した、しっかりとした、深みのある  
魅力的な一人の人間になつてもらいたいというのが、誰もがふつう若い人に望む  
一般的な願いなり想いではないだろうか。ならば、若き人よ、

他人が自分に対して、どういうことをしてくれるかを問うのではなくて、

自分が自分の人生に対して、なにができて得るかを自らに問うてほしい。また、

他人が自分に対して、どういうことをしてくれたかを問うのではなくて、

自分が自分の人生に対して、なにができて得たかを自らに問うてほしい。

オリンピック競技

## オリンピック競技

多種多様に満ちたスポーツ競技をあれこれ観ながら、いつも感じることは、なぜか同じような想いであり、

——ある目的に向かって、生き生きと躍動して

いく人間の姿こそ、美しい……。そこには

むだな動きもむだな飾りもそしてむだな言葉もない。

あるのは長い時間と忍耐とたゆまぬ努力によつて

鍛え抜かれた肉体と精神とが今、己れに挑み、己れと闘い、

そして、今、將に自分の限界をさらに人間の限界さえも

敢えて乗り越えていこうと生きて躍動している、その

張りつめた肉体と精神との積極果敢な姿があるだけでしよう……。

想えば、遠く古代ギリシアのその時代を起源とし、その後、

復活された近代オリンピック競技大会以降、その時代、

その時代の多くの人々に広く愛され、育てられ、そして、

今日のような物質文明、機械文明の時代に至つても、なお

世界中の多くの人々を熱狂させ得る力を持っている

オリンピック競技とは、スポーツとは、一体、何だろうか。

そこには遠い昔から今日も尚、永遠なほとわに変わりようのない

人間がいかに人間らしくある目的に向かって生き生きと躍動していく

張りつめた肉体と精神との『原型』があるからではないでしょうか……。

\*

\*

如何にどうすれば自分の力を最大限に發揮することができるのか。

如何にどうすれば自分の持てる力のすべてを出しきることができるのか。

いろいろ様々な想いが脳裏に浮かんではまた消えていくそのなかで、……

より速く、より高く、より遠く、より強く、そして、より美しく、それはまた、

何もスポーツの世界だけに限らず、あらゆる分野においても人間が人間としての

前進と進歩と歓喜と創造とを深く追い求めては、人間がいかに人間らしく

生きて躍動していく、そこにはむだな動きもむだな飾りもそしてむだな言葉もない

あるのは己れに挑み、己れと闘い、そして、ある目的、目標に向かって生き生きと

躍動していく張りつめた肉体と精神との鮮やかな姿があるだけではないだろうか……。

ソ  
ネ  
ツ  
ト  
十四行詩

## 挑戦者

遙か遠い昔から人はなぜか前進、また、進歩を追ひ求めながら、或る者は、その途上にて夢破れては消え、また、或る者は、目的を達成しながらもなほ、己れと闘ひ、新たに挑みつけ、やがては散りゆく人の身と、あらゆる人の世の営みのその中、

敢て静かで穏やかな日常日々の生活から離れて、苦悩、孤独、試練、危険、渦巻く激動の世界へと、また一つの命さへ散らしかねぬ冒険、危険を冒してまでも、愚かにも何故、人はまた、敢て新たに挑みつづけるのだろうか。

遙か碧空と海の、見果てぬ水平線の彼方に憧憬つつ、孤独、港を離れ、旅立つてゆく、その行く手に待ち受けるものは、荒海、暗礁、挫折、苦悩、絶望、暗雲渦巻く暴風雨に巻き込まれ、喘ぎ、苦しみながらも、なほも進みゆく船の……

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、又、種々の仕事や冒険探検、恋愛、旅行、趣味、生活、遊び、その他、空に、海に、山に、陸に、そして、未知なる領域（世界）へと、人はまた明日、何に向つて挑戦するのだろうか……。

雄魂

夜空に白光なる軌跡を残しながら何時しか消え去りゆくかの彗星の姿にも似て、何時の世にも、時、空間を超えて語り継がれ、消えては再び甦る不死鳥のごとく、その昔から半神と称せ、讃へらるるその英雄の、休みなく活動する巨大な情熱をその内深くで烈しく

燃やし続け、地下、地上、大空の世界を縦横無尽に駆け巡りては躍動しながら、此の世を地上をひたすら走りつづける雄姿の……絶望、暗闇、苦悩、憂愁、苦難、苦難、暗礁、暴風雨、泡立つ怒濤、そして、此の世のまた地上の塵埃、煩惱を知りぬいてゐる心の……

深い哀しみを帯びて満ちる藍色の深き海のその底から、遙か碧空に燃えて吹き上る海底火山の岩漿のごとく、絶えず躍動し、己れと闘ひ、眠ることを知らぬ魂の……

天地を金色に染め変へつつ大海に沈み入る夕陽にも似て、ひたすらその身を炎と燃やしつづけ、今、沈むその身から一羽の海鳥は、茜の空に向つて舞ひ昇るだらうか……。

## スフィンクスの謎

それは遠く最古の文化文明発生当時から今日の機械物質文明に到るまで、恐らく、人間はただ意味なくこの世を生きて消えゆくのみで生活では満足できず、また、目先の欲、目先の快楽にひたすら溺れ入るだけでも何故か満足できず、さらに人間としての生きる意味を問ひ、深め、求めながら、尚もあてなく彷徨ふ旅人の……

遠い神話の世界に見らるる希臘のスフィンクスは、原野を縦横無尽に駆け巡り得る百獣の王の獅子の如き柔軟かつ強靱な肉体と、知性を宿した、その女顔と、大空を自由自在に飛び翔り得る自由の翼の精神とを兼ね備へ持ち、テーベ市付近の岩の上で、道を通る旅人に、謎を問ひかけてみたといふ。

遙か紺瑠璃の大空の下、幾千年もの人類の歴史を見つづけ、見下しながらも、頑強に沈黙を愛して語らぬ、スフィンクスは、現代を生きる、我々にさへ、時、空間を超えて、今なほ変らぬ謎を問ひかけてゐるのだろうか。

この世で人を何をなし、そして、何処へ行けばよいのだろうか……。

—— 生きるとは、人間とは、人生とは、そして、自分とは……

スフィンクスの謎は、いまだ解き明かされてはゐないのだろうか。

——古代ギリシア時代、かの

マラトンの地では激しい戦闘があつたといふ。

ペルシア帝国とギリシア（アテナイ）軍との、

今、そのマラトンの地よりアテナイへの長い道程を

孤独、黙々と走りつづける男があつたといふ。

ひたすら、ひたすら一つの使命を心に深く刻み込んで、

野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつづめ、

ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。

いま、その胸にはなにが去来するといふのだらうか。

いま、その瞳にはなにが映るといふのだらうか。

\*

ただ、ただなにかを繰り返してゐるのだらうか。

ただ、ただなにかと闘ひつづ、耐へてゐるのだらうか。

\*

ただその肉体だけは永々として躍動してゐる。

ただその肉体の歩みだけはどこまでも鮮明である……。

ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。

野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつづめ、

その途上で歩みをとめることもできただらう。また、

その途上で自己を慰めることもできただらう。

だが彼は走りつづけるだけの男であつたといふ。

やがてアテナイへとその歩みをひたすら進め、そして、

『わが軍勝てり』と、

戦ひの勝利をアテナイ人に伝へたその直後、

その場で若き生命を散らしたと遙か古の故事に聞く。

——国家（人種）民族を問はず、世界中のあらゆるところで……

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、また、

医療、工業、商業、農業、漁業、サービスマン、冒険、探検、その他等、

今もなほ、各分野で黙々と走りつづけるそのマラソンランナーたちには、

遠い古の戦士にも似た赤き血潮が脈々と流れてゐるのであらう……。

ひたすら、ひたすら遠い道程を走り抜いた数多くの人間たちの

その人類への真の功績者には緑深き月桂樹の枝葉がよく映える……。

## 短距離ランナー

スタート前の短距離ランナーたちは、  
各々の肉体に流れる赤き血潮を、また、  
心臓の張り裂けそうな高まりを、  
全身に散らしながら……  
足をかけ、  
手を定め、  
やがて腰を上げる。  
息は殺し、  
喉は枯れ、  
眼は一点を見つめては、  
耳を深く澄まし、  
全身の筋肉は  
緊張の極限を超えて  
微震を起こし、  
ただ一瞬の飛躍に賭ける。  
すでに勝負の念は、  
もはや消え去り、  
ひたすら、ひたすら  
心の無と耳の音を待つ……。

生の躍動の極限が

今、走る

夢とロマンを求めて

## 夢とロマンを求めて

——例えば、一九二七年五月二〇日のその朝、ニューヨークの飛行場から出発したスピリット・オブ・セントルイス号は、その後三十三時間半の孤独と苦悩と試練のその究極に、遂にパリへと到達して念願の「大西洋無着陸横断飛行」に成功した若き飛行士リンドバーグは、まさに大空に自分の夢を追い求めつづけ、そして、大空に男のロマンを感じた人ではなかったろうか……。

——例えば、当時、大海のその涯ては巨大な滝やら怪物などが棲むと未だ信じられていた時代に、敢えて地球円球説を信じて、そして、「西へ西へと航海をすれば、必ずインドに行き着ける」と深く信じて、それを敢えて実行した探検家コロンブスは、その西への航海に自分の人生のすべてを賭けて、西へと、かの新天地（アメリカ）へと凶らずも旅立った人ではなかったろうか……。

——例えば、若き登山家ウィンパーは、当時、魔の山と恐れられていたマッターホルン登頂に、敢えて挑みつづけ、度重なる挫折を何度も何度も繰り返しながらも、遂にマッターホルン登頂に成功した彼と同行の六人の登山家たちは、困難を踏み越えて行く、その一步、一步の歩みにこそ、確かな手応えをその全身で深く感じながら歩み進んだ人たちではなかったろうか……。

——例えば、考古学者シュリーマンは、八歳の時に見たという「トロヤ落城のさし絵」と、また、ホメロスの「叙事詩」とを深く固く信じて、その後、商人として得た財産の多くをそそぎ込んで、トロヤ遺跡、ミケナイ、ティリンス、その他の発掘、発見、研究に自分の半生のほとんどを注ぎ込んだ彼は、そこにこそ自分の夢とロマンとそして生きがいとを感じた人ではなかったろうか。

——例えば、若き語学の天才シャンポリオンは、小さい頃から古代オリエントの言語や事物などに興味を感じ抱き、十一歳でヘブライ語、十二歳でアラビア語、シリア語、カルデア語などを学び、そして大学では古代史とコプト語とを修め、そしてかのナポレオンのエジプト遠征の際に、ナイル川支流で発見されたいわゆる「ロゼッタ石」とフィラエ島出土のオベリスクの碑文などとの比較対照から、約二〇年の歳月を費やしついに古代エジプトの象形文字の解読に成功した彼は、古代へのロマンと古代エジプト人の「言魂」に触れることのできた最初の人ではなかったろうか。

——例えば、一九〇九年アメリカのピアリー隊らによる北極点制覇により、人々の関心は南極へと向かい、イギリスのスコット、ノルウェーのアムンゼン、そして日本の白瀬隊らが期せずして、一九一〇年に南極へと赴き、そしてスコット隊長率いるイギリスの探検隊とアムンゼン率いるノルウェー隊との人類初の南極点到達をめざしてお互い激しく競い合い、そしてスコット隊長らはアムンゼンより約一ヶ月ほど遅れて南極点に到達し、その失意の帰途、激しい吹雪と食糧不足と凍傷等により全員が死亡するという悲劇に遭遇するわけだが、前人未到の南極点をめざして旅立った人たちの、その人間の勇氣と意志とその名とをその地に留めた人たちではなかったろうか。

——例えば、玄奘こと三蔵法師は、十三の時に寺に入りその後は仏教の研究に励み、その仏教に對する幾多の疑問点を解くために、仏教発祥の地であるインドへと、当時の出国の禁を犯してまでも、敢えて六二九年（二十八歳の頃）、長安からインドへの長い旅にと出発し、その旅の途上での様々幾多の危難（困難）等乗り越えて、インドへと辿り着き、そこで戒賢らについて仏教を学んだ後、六四五年に多くの教典と仏像とを土産に長安にと帰国し、その後は教典の膨大な量の翻訳書や『大唐西域記』などの書物を遺した三蔵法師は、その「西域」への旅を通して、いわゆる『大悟』への道を自らの努力によって、一步、一步、歩み進んだ人ではなかったろうか。

——その他、宇宙に大空に大海に山々に大陸にまた様々な湖や沼に河川に地下に地底に、と、数知れぬ挑戦者の姿が、古今東西を問うまでもなく、数限りなく存在したことでありましょう。

その行く手がたとえどんなに暑かるうが、また寒かるうが、また如何よ<sup>どの</sup>うな場所であろうとも、また如何なる暴風雨、洪水、竜巻、吹雪、雪崩<sup>なだれ</sup>、海の怒濤、砂塵の嵐に襲われようと、また、たとえ襲い来る迅雷、噴火、大地震、大火、飢え、心苦、肉体的苦極に打ちひしがれようと、またこの世における如何なる苦難、如何なる困難、また如何なる状況、状態に臨んでも、人間はそれらを乗り越えていける可能性を秘めているということを、現実にまた身を以つて「実行」することによつてこそ、われわれ人間にまた人類に生きる勇氣、希望、夢、ロマン、そして生きる力と、人類の可能性に「一条の光」を与えてくれることにもなるのでしよう。

敢えて大きな困難に挑みつづけ、越え難き大きな困難を乗り越えてゆく肉体と精神力！

挑戦者<sup>チャレンジャー</sup>のまさに生きて躍動<sup>すがた</sup>していく姿こそは、如何にも人間らしい姿<sup>すがた</sup>なのかもしれない。

それは限らない未来に向かつてのわれわれ人類の前進と進歩と歓喜と創造とを象徴している。

——政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、冒険、探検、福祉、公害、食糧、エネルギー、その他の種々の問題や、また、様々な紛争や犯罪（事件）、事故、難病、宇宙開発、未知なる領域（世界）、その他の、この世におけるあらゆる分野、領域に渡つて多種多様な難題が数多く山積していることでしょう。

——遙<sup>はる</sup>か遠い昔<sup>むかし</sup>から多くの人々が数知れぬ困難に挑み、越え難き大きな困難を乗り越えてきた。現代を生きる我々もまた、彼らの成し遂げた業績と遺志とをしつかりと受け継いで、そして、今なお山積する多種多様な解決し難き大きな難題に対しても、敢えて挑みつづけ、そうして、数多くのこの世における解決し難き難題（難問）を一つ、一つ確実にまた堅実に解決していく、或いはまた、各それぞれの分野（領域）においても新しい道を積極的に切り拓<sup>ひら</sup>いていくという、そういう、われわれも明日に向かつての真の「挑戦者<sup>チャレンジャー</sup>」であるべきではないだろうか……。

\*注 登頂には成功したが、下山の際に同行の六名のうち四名が遭難死する。

\*注 アムンゼンが南極点に到達したのは、一九一一年の十二月十四日である。

\*注 「大唐西域記」は、太宗の勅命により、玄奘が口述し、それを弟子の弁機に

編述させたもの。

不死鳥

## 不死鳥

遠くその霊鳥はアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに孤独棲み居ては歲月を送り、何故か果実亦花の類などを余り食はず、乳香また芳しい馨の樹脂などを好みて食ひながら深く味ひ入る日々の、五百年もの永き歲月を生きにし後に、榿の木或はまた棕櫚の木の頂きに巢を造りて、巢の中には肉桂、甘松、没薬などを集め、積み重ねて、身をそこに横たへては、其等の馥郁たる馨に深く包まれながら最後の息を引き取り、その滅びし親鳥の肉体から、新たに一羽の幼いポイニクス「不死鳥」が誕生し、その幼き鳥も何時しか大きく羽毛も生え揃つて、両翼と力強く、雄々しく成熟する頃には、父親の葬儀を行ひ営むために、遙々アラビアのその地から、大空を舞ひ翔りて遠く埃及のヘリオス神殿へと、巢を遺体を運びて、太陽神の祭壇に置き、その遺体の巢はやがて芳しい炎の中で燃え尽きるのだといふ。不死鳥は、再び、遠くアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに舞ひ戻り、孤独その地に宿り棲むといふ、遙か遠き大昔から伝へらるる古代埃及のその不死鳥、神話はまた、この世に於ける出来合ひ的な表面的な「影」の世界を楽しむ時代から離れて、奥深き底知れぬ物事の本質、真実、真理、源泉、また、その生命を深く確かめ味ひ入るといふ根源、世界に想ひを深めて、白昼、夕暮、深夜、未明、夜明、時、空間を問はず、休むともなく襲ひ来る孤独な思考、冥想、また、孤独な夢に憑かれて深く、その身も心も狂はしく熱く焦がして息も氣も絶え絶えの、苦惱、孤独、暗闇、煩惱、喜怒哀楽、怨念、妬み、嫉妬、憎悪、その他、此の世で味ひ知るであらうあらゆる思ひと、人間、動物、植物、自然、宇宙、そして、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、漁業、その他の種々の仕事や冒険、探検、恋愛、旅行、趣味、生活、衣食住、遊び、その他、此の世のあらゆる営みのなかで自ら体験、経験するであらう、また、見聞き学び知つてゐるであらう其等の、此の世で見聞き嗅ぎ味ひ感じ知るあらゆる思ひを、心の坩堝のなかでどろどろに混沌と深く溶かし込んで、その真底から湧き上つて来る想ひの魂、また、生命のすべてを炎と燃やし尽くして燃え盛る果なき思考、また、冥想のなかに深く耽り入り酔ひ痴れる、その燃え盛り狂ふ炎によつて醸し出さるる芳しい馨、息吹、想ひに深く溶け入り、時を忘れては深く根源境に酔ひ痴れ溺れ入る没我状態のその最中に、新たな生命を授かるといふ、光陰を長く果しなく重ね過す日々の、突然、遂に不死鳥としての両翼、その金色と赤色の色彩で妖しく光輝くといふ、その自由な精神の、飛翔の、両翼を得ては、地下、地上、大空、時、空間をさらに超えて、無限なる世界へと八方自在に舞ひ翔り舞ひながら、遠く獲物を追ひ求め続けては、狙ひ定めし獲得を想ふにまかせて捕へ、遙か碧瑠璃の天空へと遠く舞ひ翔り入るといふ遙かその雄姿の、天翔る聖鳥、また、霊鳥の麗姿そのままに、神聖な、また、天空の遙か遠き太古の太陽神の神殿、その幽遠、高遠、神秘なる果しなき無邊無垢なる領域へと、孤独憑かれし如く、不滅の精神の聖域へと舞ひ翔り入るといふ伝説でも、また、あののだらうか。何故か休むともなく絶えず活動しつづけるその精神の……今、肉体の滅び去りゆくその時に、果してその身に宿れる魂は、何処へと、また、地上に残した九天の高みの精神は、幾度ともなくこの地上に甦りて、永遠に滅びることなく、この地上で生きつづけるといふのだらうか……。

## 不死鳥

遠くその靈鳥はアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに孤独棲み居ては歳月を送り、何故か果実亦花の類などを余り食はず、乳香また芳しい馨の樹脂などを好みて食ひながら深く味ひ入る日々の、五百年もの永き歳月を生きにし後に、樗の木或はまた棕縞の木の頂きに巢を造りて、巢の中には肉桂、甘松、没薬などを集め、積み重ねて、身をそこに横たへては、其等の馥郁たる馨に深く包まれながら、最後の息を引き取り、その滅びし親鳥の肉体から、新たに一羽の幼いポインクス「不死鳥」が誕生し、その幼き鳥も何時しか大きく羽毛も生え揃つて、両翼と力強く、雄々しく成熟する頃には、父親の葬儀を行ひ営むために、遙々アラビアのその地から、大空を舞ひ翔りて遠く埃及のヘリオス神殿へと、巢を遺体を運び、太陽神の祭壇に置き、その遺体の巢はやがて芳しい炎の中で燃え尽きるのだといふ。不死鳥は、再び、遠くアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに舞ひ戻り、孤独その地に宿り棲むといふ、遙か遠き大昔から伝へらるる古代埃及の、その不死鳥、神話はまた、この世に於ける出来合ひ的な表面的な「影」の世界を楽しむ時代から離れて、奥深き底知れぬ物事の本質、真実、真理、源泉、また、その生命を深く確かめ味ひ入るといふ、根源世界に想ひを深めて、白昼、夕暮、深夜、未明、夜明、時、空間を問はず、休むともなく襲ひ来る孤独な思考、冥想、また、孤独な夢に憑かれて深く、その身も心も狂はしく熱く焦がして息も気も絶え絶えの、苦惱、孤独、暗闇、煩惱、喜怒哀楽、怨念、妬み、嫉妬、憎悪、その他、此の世で味ひ知るであらうあらゆる思ひと、人間、動物、植物、自然、宇宙、そして、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、漁業、その他の種々の仕事や冒険、探検、恋愛、旅行、趣味、生活、衣食住、遊び、その他、此の世のあらゆる営みのなかで自ら体験、経験するであらう、また、見聞き学び知つてゐるであらう其等の、此の世で見聞き嗅ぎ味ひ感じ知るあらゆる思ひを、心の坩堝のなかでどろどろに混沌と深く溶かし込んで、その真底から湧き上つて来る想ひの魂、また、生命のすべてを炎と燃やし尽くして燃え盛る果なき思考、また、冥想のなかに深く耽り入り酔ひ痴れる、その燃え盛り狂ふ炎によつて醸し出さるる芳しい馨、息吹、想ひに深く溶け入り、時を忘れては、深く根源境に酔ひ痴れ溺れ入る没我状態のその最中に、新たな生命を授かるといふ、光陰を長く果しなく重ね過す日々の、突然、遂に不死鳥としての両翼、その金色と赤色の色彩で妖しく光輝くといふ、その自由な精神の飛翔の両翼を得ては、地下、地上、大空、時、空間をさらに超えて、無限なる世界へと八方自在に舞ひ翔り舞ひながら、遠く獲物を追ひ求め続けては、狙ひ定めし獲得を想ふにまかせて捕へ、遙か碧瑠璃の天空へと遠く舞ひ翔り入るといふ遙かその雄姿の、天翔る聖鳥、また、靈鳥の麗姿そのままに、神聖な、また、天空の遙か遠き太古の太陽神の神殿、その幽遠、高遠、神秘なる果しなき無邊無垢なる領域へと、孤独憑かれし如く、不滅の精神の聖域へと舞ひ翔り入るといふ伝説でも、また、あののだらうか。何故か休むともなく絶えず活動しつづけるその精神の……

今、肉体の滅び去りゆくその時に、果してその身に宿れる魂は、何処へと、また、地上に残した九天の高みの精神は、幾度ともなくこの地上に甦りて、永遠に滅びることなく、この地上で生きつづけるといふのだらうか……。

英雄

果たしてどういう人物であれば、いわゆる『英雄』と呼ぶにふさわしい人物であるのか？それはもちろん、いろいろと「意見や見解」の分かれるところであるだろうが、ただ、ゲーテは、かのナポレオン・ボナパルトを評して、次のように言っている。

「……ナポレオンが偉大だった点は、  
いつでも同じ人間であったということだよ。

戦闘の前だろうと、戦闘のさなかだろうと、  
勝利の後だろうと、敗北のあとだろうと、

彼はつねに断固としてたじろがず、つねに、  
何をなすべきかをはっきりわきまえていて、  
彼は、つねに自分にふさわしい環境に身を置き、

いついかなる瞬間、いかなる状態に臨んでも、それに対処できた。……」

「彼はいつも開悟し、いつも明晰で、決断力があつた。

どんな時でも、有利だと認めたこと、必要だと認めたことなら  
即刻実行に移すだけの力をそなえていた。

彼の生涯は、戦いから戦いへと、勝利から勝利へと進む

半神の歩みであつた。まちがいなく彼は絶えず

開悟した状態にあつたといつてもよいだろう。……」

「われわれの目には、不思議に見えるし、  
ほとんど理解できないね。だが、とにかく事実は事実だつたのだし、  
しかも、われわれの目の前で起こつたのだからね。……」

「ナポレオンは花崗岩でできた人間だといわれたが

それはとくにその身体についていえることだよ。

あの人はどんな無理なことでもやつたし、

また、そうするだけの力もあつたではないか！

熱砂のシリア砂漠から、モスクワの雪原にいたるまで、

その間にどれほど数えきれない進軍や戦闘や

野営があつたかも知れないのだ！

またその際、どれほどの苦悩や肉体的困苦にも耐え

ねばならなかつたことか！

わずかな睡眠とわずかな食事、しかも不断の最高度の精神活動！

ブリュメール十八日の恐ろしい緊張と興奮の際に

真夜中になつても彼はまだ一日中何も食事を摂つてはいなかつた。

それでも、彼の念頭には、食べものなことなどはなく

深夜に至つてもなお、

フランス国民へのかの有名な布告を起草するだけの力を

十分に身内に感じていたのだ。

あの人が一体どんな苦難をなめてきたかを考えるならば  
四十歳になつたときに、彼の身体にはもはや一かけらの

十分な部分も残ってはいなかったらうと考えられる。けれども、あの年になっても、依然として、完璧な英雄ぶりを示していたのだよ。」(ゲーテとの対話)

ええ、まあ、たとえそうだとしても、

ナポレオンもまた数多くの人たちを殺傷したでしょうし、また、不道徳なこともあれこれしたんじゃないでしょうか？

もちろん、そういうことも多々あったかも知れないが、しかし、それでもなお、われわれがナポレオン・ボナパルトという人物に心惹かれるところがあるとすれば、それは恐らく、あの『巨大な悪魔的ダイモニックなエネルギー』と『ほとんど休みなく活動し続ける肉体と精神力』ではないだろうか。

どうしてあのように休みなく活動し続けることができ得るのか、或いはまた、どうしていついかなる瞬間、いかなる状態に臨んでも、それに対処でき得たのか。恐らく、そういうところではないでしょうか。ゲーテの表現が

それほど大げさなものとは思わないのです。恐らく、ゲーテ自身もそれに近いような人間だったのではないだろうか……。

——この同じ時期に、ゲーテ、ナポレオン、そして、ベートーヴェンというこの三人、三様の人物が、ほぼ同じ時代に生き、そして、ゲーテは学問、芸術の分野で、ナポレオンは主に政治の分野で、そして、ベートーヴェンは音楽の分野で、それぞれがそれぞれの分野、領域で活躍、活動していたということは、非常に興味深いもののように

思えてならないのです。彼らが共有していたものはなにか。恐らく、「休みなく活動し続ける『自由の精神』であつたでしょう。……」

\*

\*

「その他、状況への適応能力、混乱した状況における臨機応変の能力、あらゆる問題に多くの解決を与え得る豊富な構想力、比類ない知的作業能力、人間についての高い見識と（読心力）、また、すべてを明確に洞察する知力、無用の猶予や実施の遅滞を許さず仕事を成し遂げ得る執務能力、最も困難な問題に対してもすばやく適応し、一問題から全く別の問題にたやすく移ってゆき、また元の問題に何んの混乱もなく戻ることができた。また、ナポレオンにおいて、発想、意志、行動は、信じられないほどのすみやかな一つのはたらきであった。思想と行動の間に、反省と決断のため一瞬のためらいもないようだった。」等々。

『また、一日十八時間事務所で過ごし、彼は一枚一枚無味乾燥な報告書や決済書類をめくりながら、行政の末端から一連隊の会計まで把握し、フランスの政治的、軍事的現実をくみだてていた。そして、彼が沈想におちいると、書斎でも庭園でも、歩きながら肩をゆすり、口をゆがめる。そうすると必ず重大文書の口述があるのだという。また、秘書に新聞を読ませながら入浴するか、三時間も休息するかすれば、活動力は回復したといわれる」等々。（「ナポレオン」アンリ・カルブエ著、井上幸治著）

「ナポレオンこそは、遠きを見る眼と近きを見る眼、情熱と勤勉、世界的な知識と世界的な直観、これら両者の才能を一身に兼備した完全な天才であった」という。

（『ジヨセフ・フーシェ』ツヴァイク著）

\*

\*

一八〇三年、ベートーヴェンは、耳の病気に独り密かに悩みながらも、一方では、ナポレオンの活躍に強く心惹かれていて、いわゆる交響曲第三番『エロイカ（英雄）』の作曲に情熱を激しく燃やして専念し、そして、翌一八〇四年の春になって、その交響曲はようやく完成を見、ベートーヴェンは、それをナポレオンに献上する機会を待っていたという。ところが、五月になると、フランスでは人民投票の結果、ナポレオンが『皇帝』の位についてしまったということを知った。ベートーヴェンは、非常に驚き、そして、「ナポレオンもまた単なる野心家の一人に過ぎなかったか！」と激しく憤慨し、そばにあった楽譜に近寄っては、その「ナポレオン・ボナパルト」と書かれてあった楽譜の表紙を破り取っては、それを床に叩きつけたとか、あるいはそうではなく、名前の部分だけを消しただけとかいうような有名な逸話（エピソード）が残されているわけである。ちなみに、ベートーヴェンは、一七七〇年の生まれであり、一方のナポレオンは、それよりも「一歳年上」の一七六九年の生まれになるかと思う。

一方、ゲーテは、もっと高いところから「ナポレオン」という人物を見ていたというのが通説であるが、恐らく、ゲーテは、「ナポレオン」という人物のどこか人間離れた超人的な能力と尋常ならぬエネルギーに驚嘆しながら、人間の能力の極限を見るような思いがしたのかも知れない。

「年をとると」と彼はいった。「若いころとはちがったふうに世の中のことを考えるようになるものだ。そこで私は、デーモンというものは、人間をからかったり馬鹿にしたりするために、誰もが努力目標にするほど魅力に富んでいてしかも誰にも到達できないほど偉大な人物を時たま作ってみせるのだ、という風に考えざるをえないのだ」。（ゲーテとの対話）。

また、これも有名な話であるが、一八〇八年の十月二日、エルフルトにおいて、ゲーテはナポレオンに謁見をもとめ、そして、この二人は実際に会っているいろと話をしている。例えば、ナポレオン

は、ゲーテに会ったその時に、「ここに、人物がいる！」と言ったことや、また、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』を何度も愛読したが、最後の結末が良くないと言ったこと、あるいはシーザーについての悲劇を書いたらどうかと言われた時に、ゲーテは、自分にはそういう古典的な文体がないと、答えたということやその他、いろいろと話をしたと伝えられている。ちなみに、この時、ナポレオンは四〇歳、そして、ゲーテは六〇歳であったが、それは、最初の「引用文」のなかで、「……けれども、あの年になっても、依然として、完璧な英雄ぶりを示していたのだ」というのは、この時の印象などを想い出しながらゲーテは話をしているのだろう。

さらに、ゲーテとベートーヴェンとの関わり方も非常に有名であり、例えば、ベートーヴェンは、ゲーテを非常に尊敬し、詩も愛読していて、それらの詩に自ら幾つか作曲を行なったり、また、一八〇九年には、ウィーン宮廷劇場の支配人からの依頼を受けて、有名なゲーテの戯曲『エグモンド』の「序曲」を初めとして、合わせて十曲の「劇付随音楽」を作曲している。——ところが、二人が実際に会ってみると、性格の違いからか、どうもしっくりといかないところがあつたらしく、その象徴的な出来事として有名なものが、次のようなものである。

それは、二人が庭園でたまたま皇族の一団に出つくわした時に、それを遠方に認めたゲーテは、止めるベートーヴェンから無理にも離れて、早々道ばたに身を寄せたのに対して、ベートーヴェンは、帽子を真深くにかむり直し、フロックのボタンをはめてから、身を道ばたに寄せて腕うでを後ろにして見守っていると、ルドルフ公が、自分を認めて帽子を取り、また、皇后も自分に挨拶をした、というようなことを非常に誇らしく思うわけである。一方、ゲーテはと言えば、早々道ばたに身を寄せ、そして、その一団が彼の前を通った時には、彼は帽子を手に持ち、頭を深く下げて丁寧ていねいに挨拶をしていた。その様子を見たベートーヴェンは、その後、「……ゲーテは詩人に似合わしからぬ宮廷的礼儀を重んじる人間」と評したという出来事である。

また、メンデルスゾーンの手紙の中に、「ゲーテは、最初は、ベートーヴェンについての話が出るのを好まなかった様子であったが、やがてベートーヴェンの話が出てきて、無理に『ハ短調交響曲（第五）』の第一楽章をピアノで弾き聞かせると、これは不思議と彼を感動させたらしく、しかし少しもそういう様子を見せないようにふるまい」ながら、「この曲は、人を驚かせるばかりで、一向に感動させない」と言ったただだったが、またしばらくして、「凶暴だ！ 気違い染みている。まるで家が崩れそうだ、皆が一緒にやったら、一体どんな事になるだろう」と言い、食事の時には、彼はすっかり考えこんでしまった。……等々とあるが、そのような様々な逸話（エピソード）は、ゲーテ、ナポレオン、そして、ベートーヴェンという、この三人三様の人物のいわば「人柄」や「個性」などがよく表れていて非常に興味深いものではないだろうか。

\*

\*

リ  
ー  
ダ  
ー

リーダー

指導者がすぐれていること。  
それがすべてである。  
指導者がすぐれていれば、  
必ずよい方向に向かう。

指導者がすぐれていること。  
それがすべてである。  
指導者がすぐれていれば、  
必ず人が集まり、人が育つ。

指導者がすぐれていること。  
それがすべてである。  
指導者がすぐれていれば、  
必ず不可能を可能にしていく。

\* \* \*

指導者が劣っていること。  
それが最悪である。  
指導者が劣っていると、  
なすべき方向が見えてこない。

指導者が劣っていること。  
それが最悪である。  
指導者が劣っていると、  
人心は乱れ、人は育ちににくい。

指導者が劣っていること。  
それが最悪である。  
指導者が劣っていると、  
可能なことさえも  
不可能にしてしまう……。

\* \* \*

指導者がすぐれていること。  
それがすべてである。

ほかに何もいらぬ。  
指導者が真に  
優れていれば、必ず、  
人は集まり、物は集まり、  
そして、不可能さえ可能に  
していく真の力となって  
いくからである……。

人生（人の一生）

## 人生（人の一生）

人の一生は、生まれて、生きて、死んでいくこと。

——あとは、その隙間をどう埋めていくかが、まさにその人の人生になっていくということである。

人生そのものにもともと意味や意義があるわけではない。意味や意義などは、自分が生きていくなかで、自分で見つけるしかない。その見つけたものが、まさにその人の生きる意味や意義になっていくということである。

幸せは、どこにあるのか？ 仕事にあるのか、生活にあるのか、それとも、遊びのなかにあるのか。——それは、うそ偽りなく、「自分の心がほんとうに深く満たされている状態」になるということであり、それゆえ、そのような「心の状態」になれるものに逢えた時に、その人にとっては、満足のいくものにめぐり逢えたということになるのだろう。

ただ、問題は、それが永続するものなのか、それとも、そうではないものなのか、それが大きな分かれ道であり、本来、「永続するもの」を「幸せ」と呼びことが多く、そうではないものは、むしろ「満足感」と呼ぶことが多いのではないかと思う。

例えば、「脳」が満たされることと、「心」が満たされることは、まったく同じことなのか。それとも、なにか違うところがあるのだろうか。この問題は、なかなか分かりにくい問題ではあるが、自分の心がほんとうに深く満たされている状態こそ、まさに「幸せ」な状態と呼ぶことが多く、一方、「脳」が満たされることは、むしろ「満足感」と呼ぶことが多いのではないかと思う。

さて、自分の心をほんとうに深く満たすものは、いったい何かと問えば、それは、自分の心がどこまでも深く溶け合えるものであり、それは、例えば、自分の心が知らず識らずのうちに探し求めていたものは、まさに「これだ！」と心の底からそう思えるものにめぐり逢えた時こそ、まさにその人にとっては「かけがいのないもの」にめぐり逢えた

ということであり、そういうものこそは、その人の心をほんとうに深く満たすものであるとともに、それは、一人ひとりみなそれぞれ違ったものになるということである。

\*

\*

名人・達人

## 「名人・達人」について

それは、もうどのような「分野・領域」の人たちであつてもよいが、いわゆるその道の「名人・達人」と真に呼ばれているような人たちが、例えば、「初心者」なり「素人」と呼ばれているような人たちの言動を見て、いつも感じることは、恐らく、次のようなことではないだろうか。それは、つまり、

むだな「動き」があまりに多過ぎるといふことでしよう。

むだな「飾り」があまりに多過ぎるといふことでしよう。

むだな「言葉」があまりに多過ぎるといふことでしよう。

そして、「初心者」も次第に「成長・成熟」してくるにつれて、……

むだな「動き」が次第に少なくなるということでしよう。

むだな「飾り」が次第に少なくなるということでしよう。

むだな「言葉」が次第に少なくなるということでしよう。

そして、「名人・達人」なる域に真に達するほどになれば、恐らく、

むだな動きなり飾りなりあるいはむだな言葉というようなものは何時しか消え去り、そして、その質、内容、密度、集中度、

あるいは充実度、完成度、完璧度というようなものは、恐らく、

あらゆる角度からの鑑賞にも十分に耐えられるほどになっているのだろう。

そういう「名人・達人」の「技」なり、「芸」なり、「仕事」ぶりを

じっくりと深く味わうのもまたひとつの「醍醐味」ではないだろうか。

——これは、余計なことになるかもしれないが、

手元にはいつも最高のものを置いておくこと。

そうでないと、それほどでもないようなものがなにか

非常にすぐれたもののように思えたり、あるいは見えた

りしてくるものであるから。

真に優れた最高のものは、

常に、「希有」しかない。

なぜならば、それ以下のものはほとんど

色褪せてしまうことが多いからである。……

人生の深み

この世にはもうありとあらゆるものや活動などに満ちあふれているわけだが、それは、例えば、人間、動物、植物、自然、宇宙、建築物、乗物、製品、言葉、色、音、香り、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、冒険、探検、恋愛、趣味、生活（衣食住）、映画、テレビ、ラジオ、動画、新聞、雑誌、書物、漫画、旅行、行事、祭り、賭事、遊び、犯罪（事件）、事故、その他、もうありとあらゆる分野、領域に渡って、多種多様な活動や出来事に満ちふれているかと思う。しかし、意外にふだんわれわれは、それらの対象の表面的なところをあれこれさまようことが多く、それらの対象の奥深くまで、あるいはそれらの対象の根源にまで溯<sup>さかのぼ</sup>っていくということは、意外に少ないのではないかと思う。それゆえ、それらの対象の表面的なところをあれこれ一般的にさまようだけではなく、もつと奥深くまで、あるいはもつと根源的なところまで深く入っていくということも、また、われわれ人生をより深めていくことになるのではないだろうか。

例えば、同じ音楽を聴いても、同じ絵、彫刻、陶器を観<sup>み</sup>ても、同じ人間、動物、植物を見ても、同じ風景を眺めていても、同じ書物を読んでも、同じ映画、動画、DVDを観ても、同じ講演、授業、話を聞いても、同じ芸能、民芸を観ても、同じ新聞、雑誌、漫画を読んでも、同じスポーツ、祭り、遊びを見ても、同じ放送・番組を見ても聞いても、同じ料理を食べても、同じ衣装、付属品<sup>アクセサリー</sup>を見ても身に纏<sup>まと</sup>っても、同じ香りや匂いを嗅いでも、同じ物や製品などを見ても、触れても、その他、たとえ同じものを見ても、聞いても、香りを嗅いでも、味わつても、また、触れても、人によってその「受け止め方」は、みな一人ひとり微妙に違って来るだろう。――ならば、自分は（この世にあるありとあらゆるものや活動などに対して）、

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「見分ける」ことができ得るだろうか。

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「聴き分ける」ことができ得るだろうか。

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「嗅ぎ分ける」ことができ得るだろうか。

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「味ひ分ける」ことができ得るだろうか。

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「感じ分ける」ことができ得るだろうか。

その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「とらえる」ことができ得るだろうか。

――人によって、その「深さ」は、それぞれ一人ひとりみな微妙に違って来るだろう。……

ならば、あれこれ表面的なところを意味なくさまよう「影」の時代から離れて、もつとその対象の中に深く溶け入っては、その対象を内から深く感じ知るといふ「内感」（直観）、あるいは「共感」の時代へと移行させて、そして、この世のありとあらゆるものに対して、理解をより深めていくという、それが、いわば「人生の深み」と呼んでもよいものではないだろうか。

――人間、動物、植物、自然、宇宙、建築物、乗物、製品、物質、言葉、色、音、香り、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、冒険、探検、恋愛、趣味、生活（衣食住）、映画、テレビ、ラジオ、動画、新聞、雑誌、書物、漫画、旅行、行事、祭り、賭事<sup>ギャンブル</sup>、遊び、犯罪（事件）、事故、その他、もうこの世にあるありとあらゆるものまたあらゆる活動の、それらのどういふものであるを問わず、――その対象の中に深く溶け入っては、その対象を内からじっくりと深く厳密に見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける、あるいは深く厳密にとらえる。そして、

その対象の「本質、真実、真理、源泉、その他」と深く交わって、楽しむ。

その対象の「本質、真実、真理、源泉、その他」と深く溶け合って、喜ぶ。  
それが、いわば「人生の楽しみ」であり、また、「人生の喜び」でもあり、そして、  
それこそは、まさに「人生の深み」と呼ぶにふさわしいものではないだろうか。

\*

\*

「参考文献」

- ※底本「ゲーテとの対話」上中下（「岩波文庫」）  
※底本「ナポレオン」アンリ・カルブエ著、井上幸治著（「岩波新書」）  
※底本「ジョセフ・フーシェ」ツヴァイク著（「岩波文庫」）